

新たな視点でお守り、おみくじ、絵馬など独自の授与品素材を企画、製造。87年の歴史を持つ授与品の素材奉製メーカー

長谷川製作所は、お守りやおみくじ、絵馬、破魔矢など授与品^{じゅよひん}の素材を提供するメーカーだ。全国各地の多くの神社仏閣から依頼を受け、企画からデザイン、製造まで同社グループで一貫生産している。おまけつきおみくじや根付^{ねつけ}お守りなどを先駆けて提案してきた同社。今後も神社仏閣の依頼に社員一丸となって応え、社会に貢献しながら持続可能な企業を目指す。



代表取締役 長谷川 義貢氏

- 代 表 者 代表取締役 長谷川 義貢
- 創 業 昭和12年3月
- 設 立 昭和45年10月
- 資 本 金 8,000万円
- 従業員数 49名
- 事業内容 授与品・記念品奉製、企画運営、各種支援事業
- 所 在 地 〒340-0025 埼玉県草加市谷塚仲町466-1
TEL 048-921-1221 FAX 048-921-1515
- U R L <https://hasegawaseisakusyo.co.jp>

授与品とは神社仏閣から享ける参拝^うの記念の品で、お守り、おみくじ、絵馬、破魔矢、大麻や板札（神徳を仰ぎ拝礼するためのお札）、熊手などをさす。多くは授与品を専門とする奉製メーカーで素材が作られ、神社仏閣に納められたのち、授与品として授与所に出される。

株式会社長谷川製作所は、授与品の素材を製造する奉製メーカーである。同社は全国各地の神社仏閣の授与品奉製を手がけ、これまでに1万種類を超える授与品の素材を納めてきた。取扱品目においては、業界トップクラスの実績を持つ。

「私どもが手がけるのは授与品の“素材”で、当社自身は黒子的存在です。授与品素材メーカーとして、神仏とのご縁をつなぎ祈りを込める授与品に携わらせていただいているので、“祈りをかたちに”を旨として、最高の品質を提供できる体制を整えております」（長谷川義貢社長）

授与品素材の製作は社内の奉製部にて手作業で行われるほか、宮城県女川町にある製材所を有する同社のグループ工場・株式会社東和神栄社で手がけられている。

→ さまざまな授与品を世に送り出す

同社は昭和12（1937）年、現社長の祖父が創業する。当時は鋳物を中心とした金属加工を行っており、仕事の中には神棚に置かれる鏡を鋳物で作り、それを錦で飾って桐箱に入れ神社に奉納する仕事なども行っていた。やがてその丁寧な仕事ぶりから、御霊箱^{みたま}や桐箱入り恵比寿大黒像等の奉製を依頼されるようになる。

現社長の父で2代目社長の時代には、神社から新しいお守りの依頼を受け、大黒天が持つ打ち出の小づちをかたどったお守りをキーホルダーや根付にすることを提案。常に身につけてご利益が得られる新たなお守りの形を生み出した。

「当社は、もともと授与品奉製メーカーではなく、金属加工の仕事を行っていたので新たな提案ができたのだと思います。交通安全のお守りは車内にぶら下げられるといいよね、じゃあ吸盤をつけたらどうだろう、十文字のふさをつけたらどうだろう、と。そうした先駆けとなるようなものを発案していくことが今でも当社の強みになっています」

まったく別の業界から後発者として参入した同社だったからこそ、斬新な発想で授与品にさらなる付加価値をつけることに成功したのだ。長谷川社長は「新たな授与品素材の形を生み出すことに貢献できたのではないかと語る。

その後、徐々に同社の評判は高まり、数々の神社仏閣から新たな授与品の相談や依頼が入るようになる。同時に手がける授与品の点数も増えていき、昭和48年、宮城県に同社のグループ工場・東和工芸社（現・東和神栄社）を設立。平成19（2007）年には越谷倉庫を開設し、日本全国を営業テリトリーとして事業を成長させていった。

そうしたなか平成23年、東日本大震災が発生、女川町の東和神栄社が被災する。幸い被害は少なかったものの売り上げは減少し、震災の影響で社内にも混乱が続いた。その2年後の平成25年7月、長谷川義貢氏が3代目社長に就任する。

➔ 理念を軸に事業を進める

「震災を経て社長に就任しましたが、激動の状況のなか会社の舵取りに悩み、さまざまな経営者の会や勉強会などに参加して、経営を学んでいきました」

そこで企業の背骨となる経営理念の必要性を痛感し、社員とディスカッションしながら「授与品の奉製に携わり社会貢献致します」「一致団結のもと継続的な企業発展を目指します」という、自社の経営理念を作成する。

そして次に、掲げた理念について自社でどう取り組んでいこうかと思案した。社会貢献については、“人の心に寄り添う”という自社の社会的意義を見つめながら、社会がより良い方向に進むために何ができるかを考え、震災から少し経った頃に障がい者雇用を開始する。

「障がい者雇用を行っている他社の様子を見学に行き、それを参考に取り組みを進めていきました。実際、障がいのあるスタッフを迎えてみると、元気よく、礼儀正

しく、一生懸命仕事をするその姿に私たち自身がとても刺激を受けました。そして自然と社内に仲間を思いやる気持ちが醸成され、団結力が生まれていったのです。現在、障がいのあるスタッフは3名。さらに募集をかけています」

やがて自由闊達に意見が言い合える風通しのよい社風が育まれ、現在まで続く社員全員で一致団結して歩を進める体制が自然と形作られていった。



➔ 神社仏閣と参拝者、地域を結ぶ黒子的存在

これまでに神社仏閣とともに数々の授与品を手がけてきた同社。前出の吸盤つき交通安全お守り、キーホルダーや根付お守りのほかにも同社が先駆けて提案した授与品はいくつもある。おまけつきおみくじもその一つ。さらに従来の切り絵タイプのご朱印紙に、神社名等を記載したクリアファイルをつけてセットにしたものも同社が先駆けだという。

「切り絵タイプのご朱印紙をご朱印帳にファイリングすると、手元にこのクリアファイルが残る。そこで『また行きたいな』と再び参拝に訪れるきっかけになればと思い

ました。切り絵のご朱印紙自体はもともとあったのですが、カラフルな敷き紙やファイルをつけたのは当社オリジナルです」

神社やお寺から依頼される要望を、社内の企画・デザイン開発の部隊で形に仕上げていく――「祈りをかたちに」これこそが、われわれの使命だと長谷川社長は語る。同社が神社仏閣とともに作り上げた授与品は、たちまちSNS等で話題となり神社やお寺への参拝者が



企画およびデザイン打ち合わせの様子(左右)

東和神栄社の東日本大震災後の状況

グループ工場、東和神栄社の外観

増加。授与品効果でにぎわいを見せているという。

同社の授与品素材は神社・お寺と参拝者をつなぐだけでなく、地域コミュニティの核を担う神社仏閣の役割を黒子となってしっかりとサポートしている。

➔ 授与品の入り口から出口まで

古くなったり役目を終えた授与品は、通常神社やお寺でお焚き上げをしてもらう。しかし近年、時代の流れとともに都市部の神社・お寺では煙やにおいなどの問題からお焚き上げをすることが困難になっているという。その事態を知った同社は、古札の引き取りと焼却を行う

「古札回収事業」を立ち上げた。

事業は同社管理のもと、国の認可を受けたりサイクル事業所に作業を委託。白くきれいに塗装されたパッカー車で出向いて神社仏閣から古札の入ったコンテナを受け取り高温焼却する。その後、新たな資源として循環・リサイクルされるという流れだ。現在関東圏を中心に40ほどの神社仏閣から依頼を受け、「たいへんありがたい」という声が寄せられている。

「授与品素材の奉製をするだけでなく古札の引き取りまで行うという、入り口から出口まで一貫して当社で担う体制を構築しました。現在この事業を手がけているのは、当社だけだと思います」

➔ 持続可能な企業を目指す

昨年5月、新型コロナが5類に移行され、さらに円安で国内旅行が人気を集めていることもあり、例年に比べて授与品の奉製依頼は大幅に増加しているという。

「ここ数年、生産計画によって生産量の平準化を図り、繁忙期の生産ピークをコントロールすることで社員の負荷を軽減してきました。今後もいっそう緻密に生産計画を立て、お客さまからのさまざまな依頼に応えられる体制を強化していきます」

外出規制がかかったコロナ禍には売り上げを落とすも、社内経費を節減して利益を確保したという同社。「理念にのっとって社員全員で取り組んだ団結力の賜物」と長谷川社長は語る。今後はこの団結力を礎に持続可能な企業を目指していく考えだ。

「この先将来的には、人口も参拝者の数も減っていくでしょう。けれど、神社仏閣に参拝する人の心は変わりません。授与品も存続していきます。ですから、10年後、50年後……当社が存在することを目指していくのが、私の役割だと思っています」

授与品奉製メーカーとして87年の歴史と、数多くの授与品製造実績を持つ同社。神社仏閣の伝統を重んじ、祈りをかたちにしながら100年を超える老舗企業に向けて道を歩んでいく。